外国につながる子どもたち ㊦

※「日本教育新聞」2020年12月21・28日 掲載

再増加の兆しに どう備える

昨年、新規開校した夜間中学の千葉県松戸市立第一中学校みらい分校。外国籍の生徒が3分の1を超える。他に、結婚して日本国籍を取得した海外出身の生徒も入学した。手探りの学校運営で1年を終えようとするころ新たな試練が訪れた。コロナ禍だ。

5月下旬までの臨時休業。その後の分散登校を経て翌月からようやく、本来の時間割での授業が始まった。3学年に分かれた授業をはじめ、音楽や技術家庭のように3学年合同の授業もある。加えて、日本語の力を磨きたい生徒は国語、社会、理科の時間は別の教室に移り、日本語を学ぶ。

こうした日常に、登校時の検温、自分と家族の健康状態の申告が加わった。外国籍生徒のうち、半数ほどは仕事を持つ。緊急事態宣言で経済環境は大きく変わったが、職を失うことはなかった。

稲葉清教頭は、「義務で登校するわけではなく、自分の意思で登校している。どの生徒も一生懸命に学んでいる。授業中に生徒が寝るなど考えられない」と話す。

東京都内の2カ所で、日本語を教え、高校進学を後押しするフリースクールを運営する認定NPO法人、多文化共生センター東京。枦木典子代表理事によると、まだ、日本語の力があまり付いていない中学生や、出身国で一定の就学を終えているために日本の中学校に通えない若者が通ってくる。

コロナ禍の第一波が広がったころ、このフリースクールも休業とした。自宅から出られない生徒も多くいた。夜遅くまでゲームをし、出身国の友達とやりとりしたりして、生活リズムが変わってしまった生徒もいた。日本語能力の向上は難しかった。

それでも、高校入試は待ってくれない。6月に授業時間数を減らして指導を再開、7月から通常通りの5時間授業に戻した。

高校受験を最終目標に据えて日本語を指導するフリースクール。運営するNPOでは、中学校と理科の学習用語を英語、中国語に訳した用語集を作り、一部は無料でネット公開している

10月下旬、荒川区内の事務局を訪ねると、来日したばかりの若者が仲間と共に、日本語学習に挑んでいた。

4月は例年の3分の1ほどの生徒数で新年度を迎えた。既に日本で就労している親が子どもを出身国から呼び寄せるはずが、コロナ禍のために来日できなかったためだという。

渡航制限が緩くなり、10月に入ると生徒数は増えた。外国人観光客の姿はめっきり見掛けなくなったが、生活する外国人は再び増える兆しが出ている。

数年前のこと。18歳の青年がこのフリースクールを尋ねてきた。高校受験のために願書を提出したものの、不備があって受験ができなかったという。

フリースクールで学ぶ生徒でさえ、高校進学の道は険しい。だが、このような支援の場につながることができない人にとっては、さらに厳しい。

そこにどう手を差し伸べるかが今後の行政の課題だと、枦木さんは指摘する。

（終わり）